

## 高木兼寛とヘボン

大滝 紀雄

東京慈恵会医科大学の開祖である高木兼寛と、ヘボン（一八一五—一九二一）との関係については、これまであまり発表されていないので、多少の考察を加えてみたい。

高木はセント・トーマス病院医学校で学び、一八八〇年（明治十三）帰国。翌年には、松山棟庵らと共に、慈恵医大の前身成医会を創立した。東大などドイツ系医学校の栄える中で、彼は英国風医学校設立を志したに違いない。しかし、人材などの点で純英国式学校を作るとはむずかしかった。当時はたまたま横浜などを始めとして、アメリカ宣教医らの力が大きく支配していたのを見逃すわけにはいかない。

私は以前から、高木とヘボンとの関係が深いと信じていた。それには三つの理由がある。

第一は、高木がアメリカ医学に深い関心を示していたこ

とである。

第二は、一八八五年（明治十八）一月、成医会文庫設立委員として、池田謙斎、長与専斎、三宅秀、高木兼寛の四人の日本人と、ヘボン、エルドリッジ、W・N・ホイットニーの三人のアメリカ人医師が選ばれた。

第三は、慈恵看護専門学校で最初の看護教育を実施したM・E・リードは、ヘボン、エルドリッジと同様、アメリカプレスビテリアン・チャーチ（長老教会）所属の宣教師であったことである。

以上の理由から、私は高木がヘボンに慈恵看護学校教育のために、看護婦派遣を依頼するか、ヘボンが長老教会へその意志を伝える文書でもないかと探し求めた。

ヘボン研究の第一人者である高谷道男先生が、莫大な量のヘボン関係の手紙とマイクロフィルムを所蔵され、岩波書店から『ヘボン書簡集』として、その抜粋を発表しておられる。私はたまたま、同先生と親しくお付き合いしている仲なので、しばしば先生宅へ伺い、高木とヘボン、ことにリードを中心としたものがないかを、未発表の記録中に探してみた。

その結果(一)一八八四年四月二十六日へボンがラウリーに

宛てた手紙 (二)一八八四年十月三日ブライアンのミッシェ

ンへの報告 (三)一八八五年九月十一日インブリーのミッシ

ョンへの報告などを見ることができた。(一)には日本で看護

学校を作ることは金がかかるわりには無駄の多いこと、(二)

ではミス・リードが芝の病院へ働きに行く許可を得たこと、

(三)では高木の要請によりミス・リードが芝の看護学校で二  
年間働いてよいことなどを知ることができた。

以上のことから、高木兼寛とへボンとの関係がきわめて  
深いことが解明されたが、根本的関連の追求ができないま  
まになっていた。

私と同じ目的で慈恵の看護教育史を研究している、慈恵  
看護専門学校主事の坪井良子さんは、高谷先生のマイクロ  
フィルム、慈大図書館、横濱開港資料館、明治学院等の資  
料、文献を探索、ニューヨークのプレスビテリアン・ミッ  
ションに問い合わせるなどの努力が報いられ、種々の新事  
実が発見された。一八八四〜八六年頃は宣教師常任委員会  
が頻繁に行われている。へボンはほとんどすべての会合に  
出席している。リードを招聘することについては活発な論

議が交わされたことも判明した。

一八八四年十月一日、成医会に入会希望の米英人が多か  
ったため、高木は築地精養軒で一大パーティーを開催し  
た。八名の外人を交じた六〇名の大宴会は延延六時間に  
及び、高木とへボンは同席し、歓を尽くして語ったよう  
である。

その結果、一八八一年以来宣教師としてすでに来日して  
いたミス・リードは、一八八四年十月十七日以降、看護教  
育者として毎週金、土曜の二日間、芝の有志共立東京病院  
(のちの慈恵病院)で看護指導を行うことになった。さら  
に翌一八八五年一月七日から二年間、同病院にフルタイム  
で勤務した。看護教育者として二年間の任期が終わった後  
も、引き続き二年間宣教師として日本に止まったことも判  
明した。

高木とへボンとの友情は一生続き、へボンがアメリカへ  
帰り、イースト・オレンジで九十六歳の天寿を全うしたと  
き、六十三歳の高木はへボンに弔文を送ったということ  
である。

(神奈川県横浜市)